

## 論文要旨

学位論文題目 『婦女鑑』の研究

氏名 越後 純子

女性の徳行の話を列伝形式で記した女子用修身書は、女性の模範像が具体的に示されている点で注目すべきである。このうち『婦女鑑』は、明治天皇の皇后（昭憲皇后）の内意を受け、宮内省文学御用掛（刊行時は宮中顧問官）の西村茂樹が編纂に当たり、1887年に宮内省蔵版として出版され、華族女学校の教科書に充てる目的も有していた書である。本研究は、これまで全体的な検討が行われず一面的な捉えられ方も多い『婦女鑑』について、様々な角度から多面的に考察を行い、歴史的に位置付けることを目的とする。

第I部では、『婦女鑑』自体の性格を、成立の背景、徳目構成と例話内容、例話の出典等の検討により明らかにした。

『婦女鑑』は全6巻で120話を収めているが、このような列伝形式の女子用修身書は、近世の列伝形式の女訓書の系譜を受け継ぎ明治期にも出版され、一部は教科書・口授用書として使用された。また『婦女鑑』は、宮内省蔵版の修身書として『明治孝節録』『幼学綱要』に続き編纂された。皇后が行っていた庶民の徳行の記事収集に端を発した『明治孝節録』は、後の『婦女鑑』刊行への伏線及び『婦女鑑』の一般発売・教科書使用の前例ともなった。明治天皇の内意を受け元田永孚等によって編纂された『幼学綱要』は、「教学大旨」「小学条目二件」を具体化したもので、儒教主義の姿勢が窺われ、例話は和漢のみで女性の例話は和順・貞操に集中している。『婦女鑑』はこの補遺として成立したため、儒教主義の書とされることがあるのである。しかし、宮内庁所蔵史料によると、西村茂樹が川田剛に代わって1884年に『婦女鑑』の編纂の長となった記載がある。当時は伊藤博文が宮内卿に就任し、皇室の近代化・欧米化を目指して各種改革を行い、華族女学校の設立準備時期でもあったため、「特異な洋学者」である西村が適当とされたことが考えられる。

『婦女鑑』の内容については、刊本に徳目分類が無いため、先行研究では「凡例」記載の4徳目が挙げられることが多いが、宮内庁所蔵の編纂稿本を見ると、12の徳目（孝行・友愛・婦道・勤儉・慈善・母道・忠誠・愛国・識見・才学・処変・雑徳）が数段階を経て決定されたことが分かる。編纂稿本にある徳目の説明文の内容等では、必ずしも儒教主義という評価とは合致しない点も多く、例話内容を見ても、多様な徳行が扱われている。また『幼学綱要』の「仁義忠孝」重視等の面は引き継いでいない。明治前期の同類書と比べても、和漢洋の女性を取り上げて多様な徳行を女性に期待していることが『婦女鑑』の特質であると言える。

更に、編纂稿本記載の例話の出典名を見ると、和漢洋にわたる多様な書物が使用され、例話選択にお

いても様々な徳目の例話や特徴的な例話群も採用されており、これが『婦女鑑』の特質につながったことが分かる。

第Ⅱ部では、『婦女鑑』の性格を、良妻賢母思想の変遷や女子用修身教科書史の中での位置、編者の思想等との関係、下賜や普及の状況等の考察により、歴史的に明らかにした。

良妻賢母思想の変遷及び女子用修身教科書における良妻賢母像の変遷に照らすと、『婦女鑑』は儒教的な女性観と良妻賢母思想の中間的位置にあるものと位置付けることができ、また女子用修身教科書の流れに照らすと、『婦女鑑』の特質はそれ以前・以後とも異なる傾向を有していることが分かる。

『婦女鑑』の編纂稿本にある徳目の説明文と同一な文章が、西村が文部省で編集した『小学修身訓』の女性向け嘉言に見られること等から、西村は『小学修身訓』編纂当時から女性に重要と考えていた徳目で『婦女鑑』の内容を構成したと理解できる。また、西村の言説等を見ると、東西の説を参考に、当時の華族階級の女性に応じた徳目内容を考慮して『婦女鑑』を編纂したことが分かる。伊藤博文が推進した華族制度改革等の時代に関校準備が進められた創立期の華族女学校向けに作成されたという要素が、『婦女鑑』の独特な性格に深く関わっていると考えられ、それゆえ、結果として『婦女鑑』は、列伝形式女子用修身書史上では総合性を帯びたものとなったと言える。一方、西村は、華族女学校校長就任以降は、『婦女鑑』編纂を通じて得た日本女性の美質の認識及び欧化主義批判の時代状況等にも沿う形で、日本の美風重視の学校改革を行ったと考えられる。

また、宮内庁所蔵史料を見ると、『婦女鑑』は限られた範囲に下賜された一方、『幼学綱要』に比べ早い段階から発売が許可された結果、学校等からの要望に応じた発売形態の変更にも対応可能となり、文部省教科書への書名の掲載も影響し、印刷部数が増加した時期も見られた。しかし後続の教科書・教訓読物等では、『婦女鑑』の特質を包括的に受け継いだ書物は一部であった。大正・昭和期には、『幼学綱要』と対での販売や解説書類の出版が行われたが、昭憲皇后ゆかりの書物という、成立事情の一方のみが注目されて使用される展開をたどったのであった。